

〈巻頭言〉

二十一世紀を先駆ける

新地方史研究誌の創刊を祝う

二 宮 哲 雄

総じて人が物事を興すにあたって、創業者の脳裡に去来するものは、「伝統か革新か」「適合か開発か」あるいは自らの「オリジナリティ（獨創性）の出し方」といった一連の命題であろう。すなわち、先人達の耕した道を忠実に歩むか、それとも新しく自分のクリエイティブ（創造的）な道を切り開いていくか、という設問である。

さてそこで、例えばその中の「適合か開発か」を取り上げて考えて見よう。それに関して、現在は世紀が替わって十年と経たない時期であるから、「世紀の替わり目」にいかに対処していくかが問題となるだろう。

ここで地方史研究誌編纂という課題を一つ取って見ても、その場合、前世紀までに先人達が成し遂げた伝統に適合していくのが良いか、それとも逆に新世紀らしく、全く新しい途を開発していくべきか、ということが問題となると思う。

その点「新世紀到来」という、目にもまぶしいばかりの、新時代の光を、じかに浴びた人生経験を持つ、比較的若い年齢層の人達には、さあ新しい道を切り開くチャンスだ、と考える人が多いことだろう。

それに対して逆に「旧体制維持継承」こそが望ましいと考える人達も多いのではないか。それは比較的高齢者の人達に多いことであろう。とりわけ前世紀に人生の大半を生き、その時代の体制に合わせた行為を行って、そうすることによって顕著な成果を挙げたり、また成功を収めたりした経験を持つ人に多いのではなからうか。

この挾間史談会が、「替わり目の時代」がもたらす時代的課題を受けて、前世紀に培われた地方史研究誌や郷土誌編集の優れた慣行を受け継ぎながらも、それらとは一味違ったセンスと中身を持つ研究誌の刊行を断行したことは、まさしくこのジャンルにおいて、二十一世紀を先駆ける快挙に出たものと賞讃せざるを得ない。

ここに『挾間史談』の創刊を、心からお祝い申し上げる。ところで、では一体、今となっては古い時代と言わねばならなくなった「二十世紀」は、どういう性格と思考の体系を持った世紀であったのか。それに対して新しい時代となる「二十一世紀」は、どのような性格の世紀となるのであろうか。その内容と、それがもたらす意味合いについて考えてみたい。そうした考察を施すことは、取りも直さず本誌の特質を基本的に捕えていくことにもつながるものと信じる。

ここでいささか簡約化されたまとめ方をお許し願いたい。私流儀のまとめ方になるかも知れないが、私は、

一、二十世紀は「単純系 (Symplcity)」の理論と思考形態が支配した時代であった。それに対して、

二、二十一世紀は「複雑系 (Complexity)」の理論と思考方法がリ

ドしていく時代となるであろう、と考える。

すなわち二十世紀は、端的に言つて、マックス・ヴェーバー (Max Weber, 一八六九—一九二〇) の理念型 (Idealtypus) 分析に代表される理論と思考のシステムが支配した時代であった。

それは先ず、研究者によつて、一個の、又は若干の観点が設定されることから始まる。次に、現実社会の中から、それらの観点に合うものを拾い上げて、一面的に高昇させたのであった。そしてそのように昇揚された諸要因を集めて、そこに一つの思想像 (理想像) をつくつた。このようにして、そこには、現実には全く無い、一個のユートピアと考えられる像 (型) が出来上つた。そして、その後それによつて現実の人間社会をも理解しようとしたのであった。

それはいかにも抽象化の効いたやり方 (方法) だと言わねばならない。

以上のようなやり方とは全く逆の方法を取っているのが二十世紀である。つまり二十世紀とは逆に今世紀は科学的な作業のなかで、始めから限り無く現実に近いとしようとしている。つまり前世紀の抽象化へのやり方とは逆に、始めから、徹底的に具体的レベルで作業を行おうと心掛けていたのである。こうした作業の趣くところ、二十世紀は、飽くまでも「実際レベル」に接近し、理論化も実証化も、そのレベルで行おうとしていることになる。

こうして二十世紀は、前世紀の地点から、留めどもなく現実社会に近づき、万事実際レベルにおいて解決していくという世紀になるだろうと思う。

以上のような時代の推移になると私は考えている。

これでわれわれの実践面での作業の方向も決まってくるものと考ええる。

ところで、ここで留意しておかねばならない重要な問題がある。つまり私の考えでは、いかに新しい二十世紀に入ったからといって、前の二十世紀の理論や考え方を、カズイステイク (決疑論的) に切り捨ててしまうのは、決して正しいやり方ではないということである。

私は、いくら世紀が替わるからといって、そこで二つの時代を實質「切断」してしまうのは正しい考え方ではないと考えている。

逆に、二十世紀の伝統は、「遺制」として、二十世紀に必ず残り、伝えられていかねばならない。

実を言えば「人間」と「社会」は、本質的に、そのような性格を持つているものと考えられるのである。つまり人間社会の原理から見ても右のようになっていると考えるのである。

ところで、上において論述した時代的推移と理論的推移を、そして二十世紀が占める現在の立場を、本誌が正しく守って編集されていることは、喜ばしい限りである、と言わねばならない。

それは実に斬新性を持ったものになっている。

1. 「歴史学の論説と研究」編。二十世紀に確立された、専門科学 (個別科学) としての歴史学の成果 (論文) を集めている。これが挾間の歴史研究の中心となる、最も重要な部分と成果になることは言うを俟たない。

2. (1) 「民俗学的研究」編、(2) 「文化人類学的研究」編。挾間地域の民俗慣行と、この地域を取り巻く国内外の地域の事象との比較研究の成果を収めている。

3. 「創造理論」編。二十一世紀的な、実際レベルでの新しい発見と理論を収めている。

以上のように、本誌は、挾間地域を中心に、現実あるがままの歴史と地域社会の実際をとらえ、収録している。優れて新世紀にふさわしい研究誌だと言えよう。

私が、本誌が二十一世紀に先駆けする成果だと断じたゆえんのものである。

大分の一隅で、ささやかな産声を上げた本誌の、二十一世紀にふさわしい呼びかけは、やがてわが国の諸地域にこだま（木霊）していくだろう。そして世界の全地域に。ついには世紀全体に。

いま、挾間から何かが生み出されようとしている。それへの期待と祈りをこめながら、私は本誌の創刊を心から歓迎したい。

なお本誌創刊にあたって、会員に推されてその任に就かれた佐藤末喜編集委員長をはじめ、二宮修二、佐藤周太両編集委員の、時代を先取りする新鮮なセンスと実行力を讃えたい。

また本誌を産む母体となった挾間史談会の河野百雄会長、二宮修二事務局長の、さらに加藤照廣氏をはじめとする五名の委員と役員、自らの研究者精神を軸にした、他の全会員に対する包容力と、併せて指導力を讃えたいと思う。

本誌は、実にそこに醸成された全会員の、研究会らしい精神と実

態をそのまま反映（再現）したものに外ならないのである。

最後に私は、挾間史談会全会員の、知力と人間力の結晶である本誌が、今後末長く続刊されていくことを祈りたい。

（二〇一〇年一月二日）